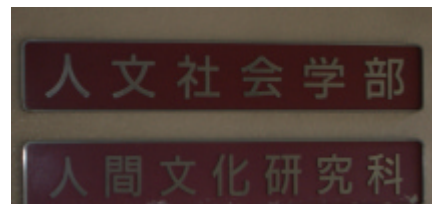


## 「第3回院生と教員の意見交換会」

上記の会が9月15日(土)14時から1階会議室で行われた。20名近くの院生と教員が参加して3時間半にわたり、大学院人間文化研究科の研究教育にかかわる諸問題について意見交換した。

院生からの強い「要望」もあって開催されるようになり、今回が3回



目になる。院生の「世代交代」もあり開催が危ぶまれたが、3人のスタッフの努力により実現できた。事前の院生アンケート結果などを踏まえ質疑が行われ、研究教育の条件整備に向けた課題などが明らかになった。その後の懇親会を含め、院生との貴重な交流の場であった。人文社会学部とともに、大学院人間文化研究科の持続的発展を願って、こうした院生と教員の交流の場をぜひ継続させたいものだ。参考までに意見交換会にあたって準備した私の「メモ」の一部を添付しておこう。

### 参考資料「人間文化研究科 設置から現在まで」

#### 研究科の歩みと課題

学部発足から4年後の2000年4月、大学院人間文化研究科博士前期課程を設置した。定員は15名であり、受験者の動向などを勘案して、2003年度から25名に拡大した。学際的に教育研究を進めるために「課題研究科目」方式、社会人を積極的に受け入れるために「昼夜開講制」を採用した。課題研究科目は現在、5研究分野、9研究科目から構成されている。

前期課程設置から2年後の2002年4月、博士後期課程を設置した。文化研究分野と人間社会研究分野の2研究分野から構成され、定員は5名である。本研究科も2003年度から大学院「部局化」を実施することになり、全教員は研究科所属となった。現在、新任をのぞく全教員が大学院を担当している。

こうして本研究科は前期課程から後期課程まで「完成」し、多くの入学者を受け入れて

きた。とくに前期課程は「昼夜開講制」や「社会人特別選抜」により、多様な社会人のウエイトが高くなっている。多数の修士の学位とともに、博士の学位（課程・論文）も授与してきている。前期課程の一般学生は公務員や民間企業などに、後期課程では最近では研究職にも数名が就職している。

設立から現在まで、問題点も少なくない。前期課程では受験生や入学者が特定の課題研究科目に集中して、科目間に偏りがみられる。後期課程においても、特定の教員に受験者が集中する傾向がある。講義科目を含めて、教員間の負担にアンバランスが生じている。厳しい労働環境のもとで社会人有職者を中心に休退学者が多く、院生間や教員の課題研究科目を超えたヨコのつながりが希薄といった問題点も指摘できる。

#### これまでの改革

社会人院生の現状や社会的ニーズに対応して、「専修免許」取得を可能にした。具体的には、幼稚園教諭と中学・高等学校教諭 1 種免許状（英語、社会、地歴・公民、福祉）に関連する専修免許である。

こうした免許・資格への対応、院生の「専門性」を確保・充実させるための改革に努めてきた。できるだけ専門に近い科目を取得できるカリキュラム、時間割の改善である。「昼夜開講制」を充実させるうえで、課題研究科目ごとの時間割の調整、土曜日の積極的な開講を進めてきた。社会人院生の休退学者が多い現状を打開するために、長期履修制度の導入などの研究条件の整備・拡充である。

受験生を安定的に確保するために、「入試説明会」を充実させながら実施してきた。また、入学後のオリエンテーションの充実に努め、院生自治会と協働して「新入院生歓迎会」を開催して、院生との親睦・交流に力を入れてきた。「教育の質の向上及び改善のためのシステム」改革の一環として、院生による事前アンケートを踏まえた「意見交換会」を定期的で開催し、院生の要望をカリキュラム改善などに反映させてきた。

#### 研究科をめぐる新たな問題

（2007年9月17日 記）